

令和2年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果

杉江 和馬 (奈良県立医科大学脳神経内科学)
泉 哲石 (奈良県立医科大学脳神経内科学)
山川 勇 (滋賀医科大学内科学講座脳神経内科)
大江田知子 (国立病院機構宇多野病院臨床研究部)
豊岡 圭子 (国立病院機構大阪刀根山医療センター脳神経内科)
狭間 敬憲 (国立病院機構大阪南医療センター脳神経内科)
坂口 学 (大阪急性期・総合医療センター脳神経内科)
井上 学 (大阪市立総合医療センター脳神経内科)
松本 理器 (神戸大学大学院医学研究科脳神経内科)
舟川 格 (国立病院機構兵庫中央病院脳神経内科)
吉田 宗平 (関西医療大学神経病研究センター)
橋本 修二 (藤田医科大学衛生学)

研究要旨

令和2年度近畿地区スモン検診の検診総数は65名で、昨年に比べ6名減少した。内訳は、男性15名、女性50名で平均年齢は81.2歳であった。検診方法は、滋賀県、京都府、大阪府、和歌山県では電話を含めた対面検診が100%であったのに対し、兵庫県、奈良県では郵便検診がそれぞれ67%、100%を占め、各府県で検診形態に差が見られた。検診者数は滋賀県、和歌山県は前年と同数、京都府、大阪府では前年に比べて減少していた一方、兵庫県、奈良県では前年に比べて検診者が増加していた。その要因として、検診者が増加した兵庫県、奈良県では郵便検診が主体であったことから、検診方法の影響が大きいと考えられた。郵便検診は対面検診に比べて検診に参加しやすい利点があり、スモン患者の高齢化やコロナ感染拡大でスモン患者の現状を把握するためには、検診方法についても改めて見直す必要があると考えられた。

A. 研究目的

令和2年度(2020年度)の近畿地区スモン検診の結果から、近畿地区におけるスモン患者の現状を把握し、その課題を検討する。

B. 研究方法

令和2年度(2020年度)の近畿地区スモン患者の現状を、各府県において実施した検診結果、スモン現状調査個人票、ADLおよび介護に関する現状調査から得られたデータを基にして解析し、その課題を検討

した。スモン現状調査個人票における「検診形態」、「併発症」、「問題点と必要な対策の項目」では、全国データと比較して各々の傾向を調査した。統計処理はFisherの正確確率検定を用い、 $p < 0.05$ を有意とした。

C. 研究結果

令和2年度近畿地区のスモン検診の検診総数は65名(男性15名、女性50名、平均年齢81.2歳)であり、昨年に比べ6名減少した。男性の平均年齢は80.0歳、女性は81.6歳で、平均年齢では有意な男女差はみら

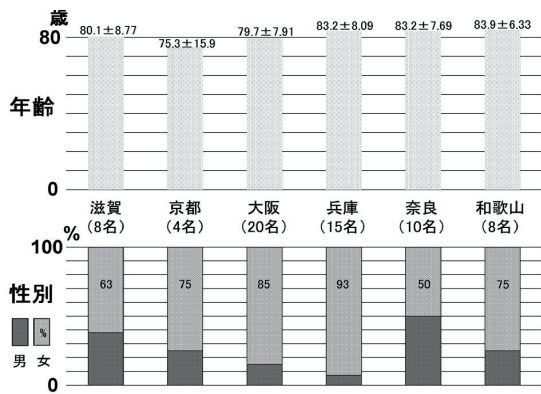


図1 検診者の年齢、性別 (近畿地区：府県別)

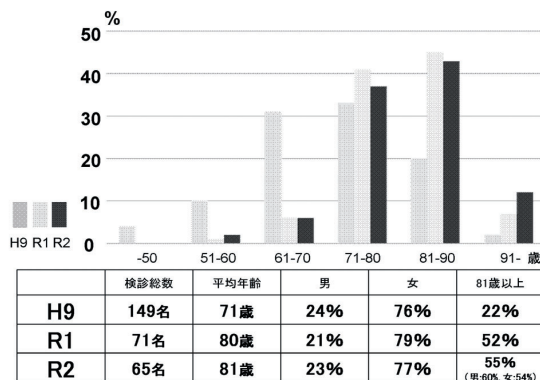


図2 検診者年齢分布の推移 (近畿地区)

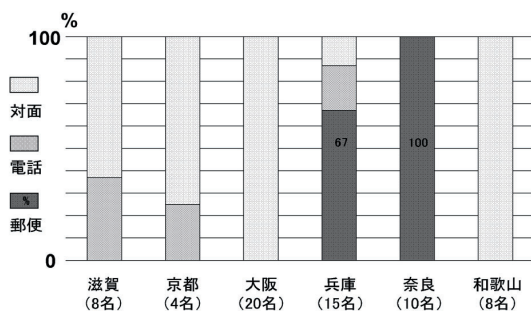


図3 検診方法 (近畿地区：府県別)

れなかった。府県別では、検診者の平均年齢は大きな差はなく、性別は兵庫県で女性の割合が高い (93%) など各府県で差が見られた (図1)。平均年齢は昨年と比べて約1歳 高齢化しており、71-90歳は昨年より減少したのに対して、91歳以上が増加していた。81歳以上は男性検診者の60%、女性検診者の54%を占めていた (図2)。

検診方法は、滋賀県、京都府、大阪府、和歌山県では全例で電話検診を含めた対面検診であったのに対し、兵庫県、奈良県では郵便検診が多く (67%, 100%)、各府県で検診形態に差が見られた (図3)。近畿地区

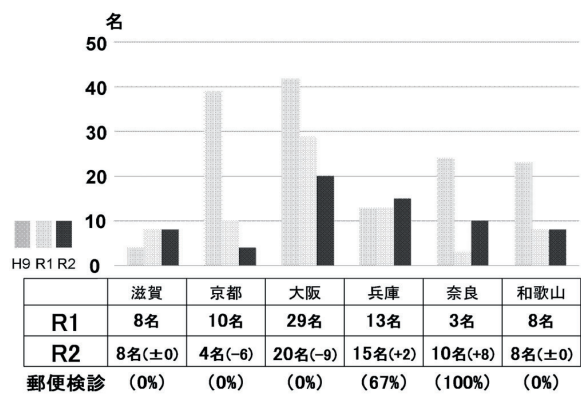


図4 検診者数の推移 (近畿地区：府県別)

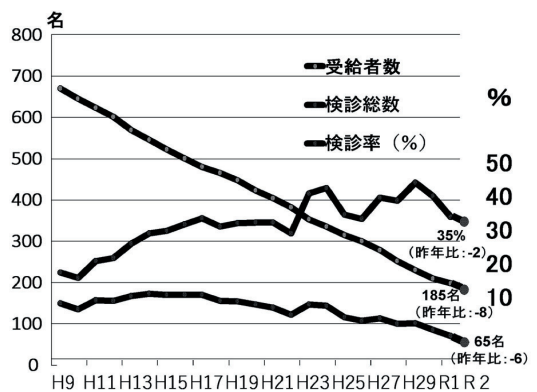


図5 受診者数と検診総数および率の推移 (近畿地区)

の郵便検診者は20名、30.8%であった。検診者数の推移は、滋賀県、和歌山県は前年と同数、京都府、大阪府では前年に比べて減少していた一方 (-6名、-9名)、兵庫県、奈良県では前年に比べて検診者が増加しており (+2名、+8名)、各府県で異なる様相を示していた (図4)。その要因として、検診者が同数もしくは減少した滋賀県、京都府、大阪府、和歌山県は対面検診が主体であった一方、検診者が増加した兵庫県、奈良県では郵便検診が主体であったことから、検診方法の影響が大きいのと思われる。近畿地区の受給者数と検診総数は共に減少し、率もわずかに減少する傾向にあった (図5)。

スモン現状調査では、BMIの平均は男性21.3、女性20.2、視力は「新聞大見出し」、歩行は「つかまり歩き」、表在覚障害は「臍以下」「膝以下」、触覚、痛覚の程度は「中等度」、末端優位性「あり」、下肢振動覚障害は「中等度」「高度」、異常知覚は「中等度」がいずれも多数であった。異常知覚の内容は「びんびん、じりじり」が7割以上で、他の異常知覚も多い結果で

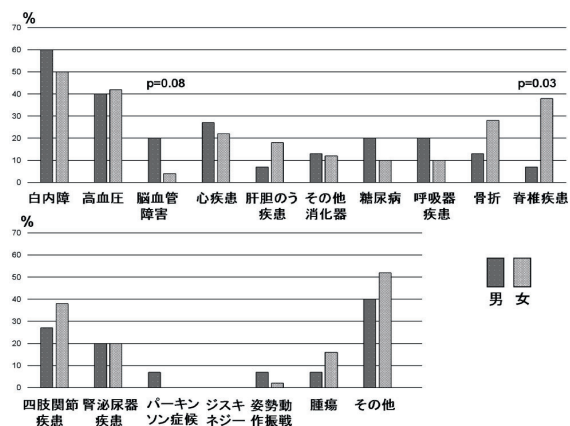


図6 身体的併発症（近畿地区）

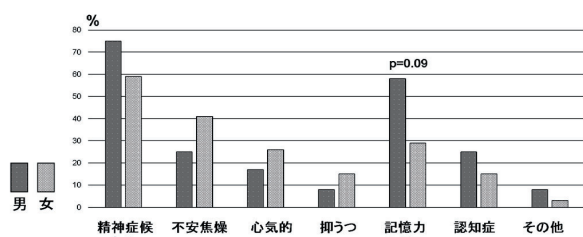


図7 精神症状（近畿地区）

あった。自律神経症状では、尿失禁は「時々」、便失禁は「なし」、胃腸症状の程度は「軽いが気になる」が多数であり、その内容は便秘が多かったが、下痢もみられた。

身体的併発症では、男性では脳血管障害が多い傾向にあったが有意差はなく、女性では骨折、脊椎疾患、四肢関節疾患が多い傾向で、脊椎疾患では有意な性差を認めた（図6）。精神症候では、男性では記憶力の低下や認知症が多い傾向である一方、女性では不安焦燥、心氣的、抑うつが多い傾向であり、いずれも有意差はなかった（図7）。

ADLおよび介護に関する現状調査では、介護申請は各府県で半数～3/4の検診者で申請されていた。独居の割合は、京都府は検診者が少ないこともあり0%であったが、大阪、兵庫で独居が多い傾向にあった（図8）。近畿地区の独居総数と独居率は最近数年では共に減少傾向にあった（図9）。

問題点と必要な対策の項目の自由記載欄では、京都府ではしびれ1名、経済的不安1名、大阪府では高齢化5名、歩行障害3名、しびれ1名、独居6名、介護負担2名、兵庫県では寝たきり1名、独居1名、経済

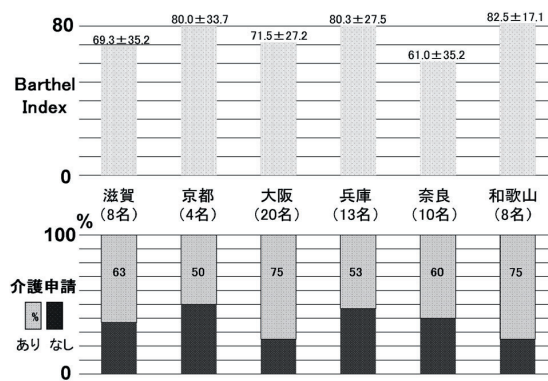


図8 日常生活動作と介護申請（近畿地区：府県別）

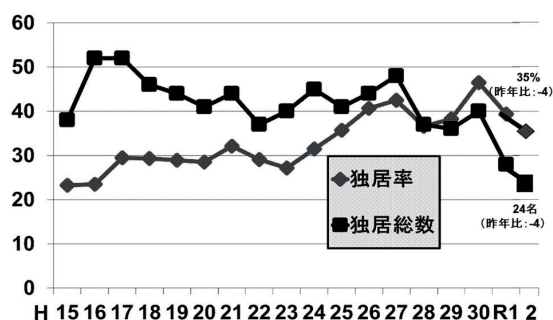


図9 独居総数と独居率の推移（近畿地区）

的負担1名挙げられ、医療者についての要望が1名挙げられた。奈良県では医療者についての要望が多く4名から挙げられた。滋賀県、和歌山県では指摘はみられなかった。

D. 考察

令和2年度の近畿6府県の検診方法は、各府県で多様であった。近年の検診者の高齢化に加えて、コロナ感染拡大の影響も大きいと思われた。検診者数は、対面検診が主体の府県では昨年に比べ減少または同数であった一方、郵便検診が主体の府県では増加していた。全国での郵便検診者数やその割合は、スモン現状調査個人票から把握することはできなかった。今後、患者の高齢化やコロナ市中感染の遷延などの社会情勢の変化により、さらなる検診形態の多様化が予想される。これまでも郵送による調査は、スモン患者の実態把握に有用であることが報告されている¹⁾²⁾。それぞれの検診形態にはメリット、デメリットを有するが、近年の社会情勢の変化においてスモン患者の現状を把握するためには、参加が容易な検診形態を取り入れるこ

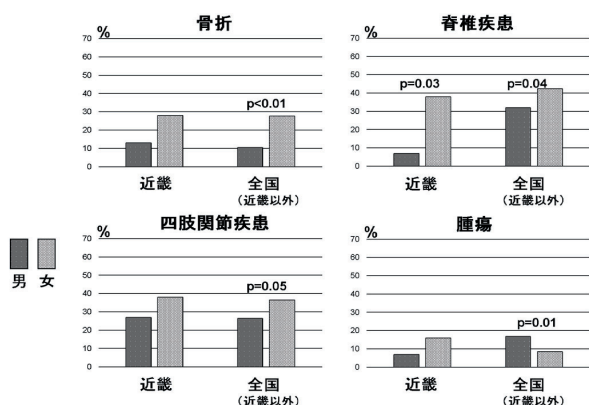


図 10 併発症 (近畿地区と全国の比較)

とも一つの有用な方法と考えられる。

身体的併発症は、近畿地区では男性で脳血管障害が多い傾向にあったが有意差はなく、女性では骨折、脊椎疾患、四肢関節疾患が多い傾向で、脊椎疾患では有意な性差を認めた。全国データでは男性で脳血管障害が多い傾向はなく、脊椎疾患では近畿地区と同様に女性が有意に多い性差を認め、骨折も女性が有意に多かった。四肢関節疾患も有意にはわずかに届かなかったが女性に多い傾向があった。平均年齢は、全国データでは女性が高齢であったが近畿地区では有意差がなかったことを鑑みると、スモン患者においても女性では骨折、脊椎疾患を抱えやすい傾向にあると考えられる。過去の近畿地区におけるスモン患者の検診結果の検討においても、骨折の既往は71歳以上の約1/3を占めており、骨折経験者は女性に多かった³⁾。また、女性のスモン患者の骨量の検討では、11例の女性スモン患者の骨量を骨評価装置で経時的に観察した結果、加齢とともに骨量が減少することが報告されており⁴⁾、スモン患者の高齢化が進む状況において骨折予防の啓発が必要と考えられる。腫瘍性疾患は近畿地区では女性に多い傾向があったが有意な性差はなく、全国データでは男性が有意に多かった (図 10)。精神症状は、近畿地区では男性では記憶力の低下や認知症が多く、女性では不安焦燥、心氣的、抑うつが多い傾向があったが、全国データではそのような傾向はなかった。

問題点と必要な対策の項目では、「医学上の問題」があると答えた患者は、近畿地区では近畿を除いた全国と比較して有意に少なく、「家族や介護についての問題」「福祉サービスの問題」「住居経済の問題」では、

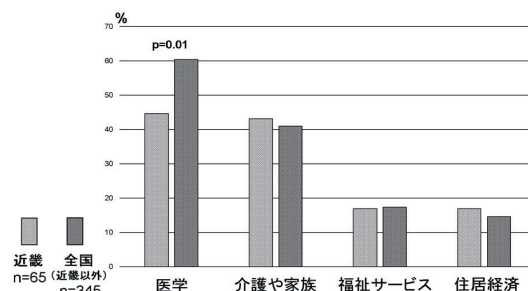


図 11 問題点 (近畿地区と全国の比較)

近畿地区と近畿を除いた全国で有意差はなかった (図 11)。自由記載欄では、近畿地区において対面検診が主体の府県では患者自らの訴えが多かった一方、郵便検診が主体の奈良県では医療者に対する訴えが多い結果であった。その要因として、奈良県では全例郵便検診であり、対面での検診に比べて医療者に対する率直な思いを表すことが容易であったことを考えた。全国スモン患者に対する質問紙による調査の報告では、質問紙を郵送する方法で全国調査が行われ、自由記載欄ではしびれや便通異常など病気の症状に対する訴えから、スモンの認知度が低いことに対する不満や検診の意義・方法についての疑問まで、様々な意見が寄せられていた⁵⁾。郵便による検診は、スモンに関する検診や診療に対する、スモン患者の率直な思いを拾い易い一つの方法と考えられた。また、近畿地区のスモン検診率は約3割であり、今回の調査では検診に参加していない患者の実態が不明である。重症のスモン患者が入院や入所のために検診に参加できない場合も多いと考えられ、実際のスモン患者全体の平均はさらに重症にシフトしている可能性がある。検診に参加することが困難なスモン患者の実態を如何に把握するかについては、今後の課題と考える。検診に参加することが困難なスモン患者には、例えば各々の患者に訪問検診をより多く実施できればその実態を少しでも明らかにすることができる可能性があるが、コロナ感染拡大下の現状では容易でない。積極的な訪問検診が困難な状況では、郵便等を用いた非対面での検診方法も、検診に参加することが困難なスモン患者を含めたスモン患者全体の実態を把握する手段として価値があると考えられる。

E. 結論

スモン患者では患者自身の高齢化が進む中において未だに感覚障害を主とした後遺症が残存し、高齢化に伴う併発症や日常生活に対する不安を抱えている現状が改めて明らかとなった。郵便検診は対面検診に比べて検診に参加しやすく、スモンに関する検診や診療に対するスモン患者の率直な思いを拾い易いメリットがあると考えられる。スモン患者の高齢化やコロナ感染拡大下でスモン患者の現状を把握するためには、検診方法についても改めて見直す必要があると考えられた。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 杉江和馬ら：奈良県におけるスモン患者の20年間の変遷 厚生労働行政推進調査事業費補助金（難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業））スモンに関する調査研究班・平成28年度総括・分担研究報告書 p 99-102, 2017
- 2) 坂井研一ら：中国・四国地区におけるスモン患者の検診結果（平成28年度）厚生労働行政推進調査事業費補助金（難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業））スモンに関する調査研究班・平成28年度総括・分担研究報告書 p 74-78, 2017
- 3) 小西哲郎ら：平成26年度近畿地区におけるスモン患者の検診結果 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）））スモンに関する調査研究班・平成26年度総括・分担研究報告書 p 63-66, 2015
- 4) 平田宏之ら：スモン検診受診者の骨量および筋肉量・筋力の検討 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患等政策研究事業（難治性疾患政策研究事業）））スモンに関する調査研究班・平成26年度総括・分担研究報告書 p 193-195, 2015

- 5) 久留 聡ら：全国スモン患者に対する質問紙による調査 厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患等克服研究事業（難治性疾患克服研究事業））スモンに関する調査研究班・平成23-25年度総合研究報告書 p 60-62, 2014